◆茅ヶ崎同盟教会たより　　２０２４年4月

全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。知れ。主こそ神。主が　私たちを造られた。私たちは主のもの主の民　主の牧場の羊。　詩篇１００篇１－３

主イエス・キリストのよみがえりのイースターを過ごしました。一年の教会行事の中でも特別にうれしい日です。十字架で死なれ、墓に葬られた主エスさまが死に勝利され、よみがえられたことはなんという喜びでしょう。主イエスさまのよみがえりを共に喜んでくれるかのように、わたしたちの周りの花たちも一斉に主を賛美するかのように天に向かって咲いています。ワクワクして春の歌を歌いたくなります。

先日読んだ本（「童謡・唱歌・賛美歌にやどる光」小川百合花著）に「春の小川」を作曲した岡野貞一（1878～1941）のことが書かれていました。「自分のことを、日本では珍しい西洋音楽の賛美歌を幼少期に接して、そのハーモニーを身に着けました。私の音楽家としての出発点は洗礼ですと述懐しています」と。彼は「故郷」「春の小川」「朧月夜」などを作曲しています。本郷中央教会のパイプオルガン、リードオルガンの奏楽者として４５年間奉仕されたそうです。「故郷」はパイプオンを弾きながら作曲され、「故郷」という言葉（詩）には天国への想いが秘められている。と著者は語っています。

幼い頃に聞いた西洋音楽がベースになり、主の民となった彼が、クリスチャンとしての喜びの声を美しい旋律に写し出したのだと思いました。彼のほか、「夏は来ぬ」小山作之助、「荒城の月」「花」の滝廉太郎もクリスチャンでした。これからは彼らの信仰の喜びの証しとして導かれ作られた曲としてこれらの春の歌を歌いたいと思いました。　　伝道師　川島正子